

トピックス II

新型コロナウイルス感染症流行に伴う麻疹及び風しんの発生状況とMR ワクチン接種率の低下

川崎市健康安全研究所 三崎 貴子

新型コロナウイルス感染症対策として海外で実施されたロックダウンや国内での緊急事態宣言に伴う外出自粛要請及び渡航制限は、地域をまたぐ人の移動を抑制したことから、新型コロナウイルス感染症のみならず他の多くの輸入感染症の発生をも抑える効果があった。特に麻疹及び風しんについては、2019年に国内で744件であった麻疹の届出数が、2020年に10件、2021年及び2022年には各6件と著しく減少した¹⁾。同様に、2019年に国内で2,298件であった風しんの届出数も、2020年に101件と著明に減少し、2021年は12件、2022年は15件とごくわずかに報告されたのみであった²⁾。

移動の制限は、感染症の発生自体を防ぐ一方で、国内では受診控え等を原因とする小児の定期接種の接種率低下を引き起こしたと考えられる。新型コロナウイルス感染症流行前の2018年度から、2021年度までの全国の麻疹含有ワクチンの接種率を以下に示す^{3,4,5,6)}。なお、風しん含有ワクチンの接種率も全く同様であった。

2018年度：第1期98.5%、第2期94.6%

2019年度：第1期95.4%、第2期94.1%

2020年度：第1期98.5%、第2期94.7%

2021年度：第1期93.5%、第2期93.8%

2019年度は、1月から3月にかけて新型コロナウイルス感染症の流行が全世界に拡大し、国内で行事の自粛や自宅療養が要請されたためか、麻疹風しん（MR）ワクチンの接種率は第1期、第2期とも低下した。これを受けて、日本小児科学会をはじめとした多くの関連学術団体や地方自治体、厚生労働省などが、新型コロナウイルス感染症の流行下であっても通常の予防接種を継続することの重要性を啓発し、麻疹含有、風しん含有ワクチン共に2020年度の接種率は一時的に回復した⁷⁾。しかし、その後再び低下が見られており、特に2021年度の第1期の接種率は93.5%と大きく低下した。

小児の定期接種とは別に、わが国では風しんワクチンの定期接種の機会がなかった昭和37年4月2日～昭和54年4月1日生まれの男性を対象として、2019年度から風しんの抗体検査と第5期の予防接種を原則無料で実施している。当初は3か年計画で開始されたが、新型コロナウイルス感染症の流行の影響で、職域に着目した大きな実施率の向上や健診機会の活用的大幅な増大は認められなかったことから⁸⁾、厚労省は2021年12月に第5期定期接種や抗体検査の実施期間を3年間延長することとした。2019年度開始時点で15,374,162人であった対象者数のうち、2022年11月までに抗体検査を受けた人が4,397,353人（対象人口の28.6%）、予防接種を受けた人が947,904人（対象人口の

6.2%)であり⁹⁾、対象年齢の感受性は未だ多いと考えられる。

海外における麻疹及び風しんの報告数も、2020年から2021年にかけて大きく減少した。2023年6月に世界保健機関（WHO）の西太平洋事務局で開催された32nd Meeting of the Technical Advisory Group on Immunization and Vaccine-preventable Diseasesの資料によると、全世界の麻疹報告数は2019年には541,247件であったが、2020年及び2021年に各93,781件、59,624件と激減した。しかし、2022年から2023年にかけてはアフリカ地域や南東アジア地域を中心に多くの麻疹アウトブレイクが発生しており、2022年の報告数は171,481件と再び増加している。また、サーベイランスの基準を達成している国が2019年から2023年にかけて81か国から65か国に減少していることから、すべての麻疹患者を捕捉していない可能性があることも指摘されており、報告数は過小評価されている可能性もある。風しんは2019年に日本を含む西太平洋地域で大きな流行があり、同年は全世界で47,905件と多くの報告があったが、2020年及び2021年は各7,565件、7,408件と報告数は減少した。しかし、2022年は12,008件と再び増加し、新型コロナウイルス感染症流行前の状況に戻りつつある。

海外においても、麻疹及び風しんの報告数自体が一時的に大きく減少したものの、定期のワクチン接種率にも低下が見られた。2019年に86%であった麻疹含有ワクチンの初回接種率は、2020年に83%となり、2021年には81%まで低下し2008年以来最低の水準となったと報告されている。

また、1,500万人の子どもたちが初回接種のみしか受けておらず、通常の公衆衛生サービスを通じて2回目の接種を受けることができていないことがわかっている。多くの国が風しんを含むMRやMMRワクチン等を使用していることから、風しんについても同様の状況と考えられる。いずれも2022年以降は報告数が再び増加しており、麻疹は各地でアウトブレイクが発生していることから、キャンペーンを含む予防接種活動を引き続き実施し2回接種を確実に受けられるように努める必要がある。

わが国では、2022年10月11日から入国者数の上限を撤廃し個人の外国人旅行客の入国も解禁していたが、2023年4月29日をもって入国制限を解除し新型コロナウイルス感染症による水際対策を終了した。この影響を受けたためか、2023年は疫学週第24週（2023年6月12日～6月18日）までに、風しんの報告数は5件と少ないものの、麻疹は18件と既に2022年の3倍の報告数に達している。確定している遺伝子型はいずれもD8で¹⁰⁾、輸入麻疹事例は今後さらに増えることが懸念される。MRワクチンの定期接種率低下を原因とした国内での麻疹及び風しんのアウトブレイクを起こさないためにも、2回接種を確実に実施することが重要であり、接種率回復に向けて引き続き啓発を行う必要がある。また、発生時には迅速な対応と対策が求められる。

1. 感染症発生動向調査 (IDWR) . <https://www.niid.go.jp/niid//images/idsc/disease/measles/2023pdf/meas23-24.pdf> (2023年7月2日確認)
2. 感染症発生動向調査 (IDWR) . <https://www.niid.go.jp/niid//images/idsc/disease/rubella/2023pdf/rube23-24.pdf> (2023年7月2日確認)
3. 国立感染症研究所 . 平成30年度麻疹風しん定期予防接種の実施状況の調査結果について . <https://www.niid.go.jp/niid/ja/aids-m/545-idsc/9060-01-2018.html>
4. 国立感染症研究所 . 令和元年度麻疹風しん定期予防接種の実施状況の調査結果について . <https://www.niid.go.jp/niid/ja/aids-m/545-idsc/9840-01-2019.html>
5. 国立感染症研究所 . 令和2年度麻疹風しん定期予防接種の実施状況の調査結果について . <https://www.niid.go.jp/niid/ja/aids-m/545-idsc/10806-01-2020.html>
6. 国立感染症研究所 . 令和3年度麻疹風しん定期予防接種の実施状況の調査結果について . <https://www.niid.go.jp/niid/ja/aids-m/545-idsc/11589-01-2021.html>

7. 日本小児科学会予防接種・感染症対策委員会．新型コロナウイルス感染症流行時における小児への予防接種について 第 2 報．http://www.jpeds.or.jp/uploads/files/20220826_corona_yobosesshu_.pdf
8. 2018 年の風疹の感染拡大を受けた第 5 期定期接種のこれまでとこれから (IASR Vol. 43 p40-42: 2022 年 2 月号)．<https://www.niid.go.jp/niid/ja/rubella-m-111/rubella-iasrd/10985-504d01.html>
9. 風しん含有ワクチンの第 1 期・第 2 期・第 5 期定期予防接種の現状と課題 (IASR Vol. 44 p53-55: 2023 年 4 月号)．<https://www.niid.go.jp/niid/ja/typhi-m/iasr-reference/2609-related-articles/related-articles-518/11982-518r05.html>
10. 国立感染症研究所．麻疹ウイルス分離・検出報告数．麻疹ウイルス分離・検出報告数 2023 年 (随時更新) 2023 年 7 月 2 日現在．<https://www.niid.go.jp/niid/ja/iasr-measles.html> (2023 年 7 月 9 日確認)